

東北支援の新しい活動をつくる 語りと朗読とアコーディオン

時空を超えて 東北を旅する

2012.04.22.SUN
15:00 START@IMS HALL

目黒実（九州大学特任教授） / 高月晶子（フリーアナウンサー） / 新井武人（アコーディオン奏者）



▲ 左から目黒実さん、高月晶子さん、新井武人さん

九州大学特任教授の目黒実さん、フリーアナウンサーの高月晶子さん、アコーディオン奏者の新井武人さんによる東北の詩人、文学者たちの作品について「語り、朗読し、演奏する」というユニークな展覧会が開催されました。

目黒さんの蘊蓄に富んだお話と、高月さんの美しい声での朗読と、新井さんの叙情的な調べが、ゆっくりとした時間の流れをつくりだし、非常に引き込まれました。照明を落としたステージでは、ステージ上に並べられる本と3名だけが浮かんでいるように感じられ、非日常的な空間を演出していました。

日本の多くの詩人、文学者は東北出身であったり東北に魅力を感じていたことから、東北では多くの文学作品が生み出されています。

例えば、松尾芭蕉は江戸から東北、北陸と旅をする「おくのほそ道」で多くの有名な俳句を詠んでいます。また宮沢賢治は岩手県花巻市の出身で、「岩手（いはて）」をモチーフとして「イーハトーブ（理想郷）」という造語を産み出したとも言われています。

“ 詩人、歌人の言葉を借りて、東北について思いをめぐらす ”

俳句や詩を通して、東北の魅力や重要性について再認識することができました。

また、「絵本カーニバル」等子どもをテーマとした活動を多くされている目黒実さんの、被災地の子ども達に対する想いを感じることができました。

「子どもの頃に体験することがすべてと言って良いくらい、その後の人生に影響を与えている。」

被災地の子ども達に対する心のケアが急がれています。

時空を超えて 東北を旅する

松尾 芭蕉 (Matsuo Basho)

「おくのほそ道」

江戸を立ち東北、北陸、岐阜へと旅した紀行文。

月日は百代の過客にして、

行きかふ年もまた旅人なり

閑さや岩にしみ入る蟬の声 (山形県立石寺)

夏草や兵どもが夢の跡 (岩手県平泉町)



▲ 朗読や紹介された作品はステージ上に並べられていました

山村 暮鳥 (Yamamura Bocho)

「空」

おうい雲よ

ゆうゆうと

馬鹿にのんきそうじゃないか

どこまでゆくんだ

ずっと磐城平の方までゆくんか

石川 啄木 (Ishikawa Takuboku)

はたらけど はたらけど

猶 (なほ) わが生活 (くらし) 楽にならざり

ちっと手を見る (「一握の砂」より)



▲ 朗読の後に解説をする目黒さん



▲ 朗読する高月さんと演奏する新井さん

長田 弘 (Osada Hiroshi)

「詩の樹の下で」

故郷・福島に捧げる詩。

草野 心平 (Kusano Shinpei)

「ごびらっふの独白」

蛙のことばを訳した詩。



▲ たくさんの物語と記憶がつめこまれたであろう
鞆の中に展示された宮沢賢治の本

宮沢 賢治 (Miyazawa Kenji)

「雨ニモマケズ」

「グスコブドリの伝記」

“世界がぜんたい幸福にならないうちは

個人の幸福はあり得ない”

(「農民芸術概論綱要」より)